

公益社団法人私立大学情報教育協会
2023 年度第 1 回情報教育研究委員会合同会議議事記録

I. 日 時：令和 5 年 5 月 18 日（木） 17：00～19：00

II. 場 所：Zoom 会議室

III. 参加者：安西担当理事、大原副委員長、吉田委員、白木委員、寛委員、玉田主査、高岡委員、佐々木委員、金子委員、高橋委員、中西委員、本村委員、山口委員、小原委員、松尾委員、児島主査、大久保委員、高嵩委員、渡辺トバ伊、渡辺主査、今泉委員、辻トバ伊
事務局：井端事務局長、野本（記）

IV. 検討事項

1. 担当理事挨拶

- ・ 会議開催にあたり、担当理事の安西先生から委員への挨拶が行われた。

2. ChatGPT への大学等の対応・発信状況から配慮すべき事項の確認（大学 Web や新聞記事からの情報）

- ・ 東北大学では、演習課題やレポート課題で予想される懸念・注意喚起について、課題内容や出題方法の工夫が指摘されている。
- ・ 東京大学では、学位論文やレポートは、学生本人の作成が前提で、評価では、ヒアリング審査・筆記試験などの組合せの必要性が指摘されている。また、積極的に良い利用方法や新技術、新しい法制度や社会・経済システムの見出しを期待している。
- ・ 名古屋大学では、知識を与えるだけの授業は成立しなくなり、契機に大学教育の在り方を考える必要性が指摘されている。
- ・ 人工知能学会では、一律が利用の禁止は何も生み出さないことで、活用を検討すべきではないか。
- ・ 国立情報学研究所では、大学教育などでは柔軟に対応するという態度が大事で、批判的思考も大事に、使う人間が AI の 1 段上に立って判断するというのであれば意味がある。相談する相手として使え、新しい発想が生まれる可能性もあるのではないか。
- ・ 立命館大学では、英語授業で、自力、機械翻訳、ChatGPT で英訳を行っており、使い分けが大事なことを学生が判断しており、英語教育で革命的な出来事だと考え、ズルをするイメージがあったが価値観を変えていく必要がある。
- ・ 中央教育審議会特別委員会では、様々な議論や懸念があるが、批判的思考力や創造性への影響、個人情報や著作権保護の観点等についてリスクの整理が必要。指導要領では 情報活用能力を位置づけており、どのように使いこなすかの視点や自分の考えを形成するのに活かす視点も重要として、ガイドラインを 5 つの視点で公表する予定にしてる。
- ・ 東京大学では、教員が AI に答えさせレベルを感じておくこと、授業・事業ごとに AI 利用スタンスを明示すること、課題の目的、達成目標、成長目標を学生に伝えて過程が重要であること、実践可能な範囲で AI から安易に回答が得られない課題・出題形式を検討すること、AI 生成文書の検出ツールは過信しないこと、教育効果をもたらす影響と効果について発信されている。

3. 理事会でガイドラインへの意見の確認

- ・ 理事会の意見では、学生の視点が薄いと思う、大学では、学生に使わせてどのように思うかを探っており、コントロールだけでなく、学生のオーナーシップを尊重し、何がいけないかを理解してもらうことが必要ではないか。
- ・ 積極的な利用を推奨しており、未来翻訳や DeepL を英語授業で使っている。発信では、全く知らない学生がいるため、まずは使ってみて、何ができて何ができないのかを知ることを求める。基本的な部分は東京大学が発信した内容があり、十分と考える。また、社会での利用を想定し、キャリア形成の観点を含める必要があり、大学間での格差に危機感・危惧を感じている。
- ・ 技術進歩が早いいため、技術的利用法は規定しても使えなくなる。使ってみることが大事で自分が分かって説明できれば問題ないと思う。学生視点で分かりやすくなるような、良い悪いのところを噛み砕いた話もあると良いのではないか。などがあったことを確認した。
- ・ ガイドラインと、他に資料を付けた方が良いのか、大学の参考になる情報を届けるために、ガイドラインを踏まえて、理事会意見を反映した参考資料など構成を検討したい。

4. 生成系 AI 使用ガイドラインの説明

- ・ 理事会での指摘は、学生向けにどのように使うのか、社会に出た時の対応への備えの2点はガイドラインに意識して含めなかった、含めるかは検討してほしい。また、各大学で学生に対してどのようなメッセージを送るのかは考えていただきたい。
- ・ 各大学の主体的な判断を優先させることを基本にしている。
- ・ 生成系 AI とは何か、支援できる活動、大学諸活動の変化を整理した。
- ・ 課題と問題点では、特に、ビジネスモデル確立の問題を含め、学生が公平に利用できる環境を指摘した。
- ・ 使用上の注意点では、特に、使用責任は使用者に帰属し、自己責任になる点をあげている。教員、学生研究、業務などの点で整理している。
- ・ 仕様の禁止か推奨かは、推奨すべきとしている。技術革新優先で注意を守り推奨すべきではないか。
- ・ 批判的思考力を養うのにどのように使われていくのか、今後の研究点と考えている。
- ・ 学習指導要領が変更され、思考力・判断力・表現力が入っており、具体的な議論も進めて欲しい。

5. ガイドラインへの委員の意見

- ・ 各大学が教育考えることに社会が変化する切っ掛けになっており、変革期を切り抜けるための意見表明として出せば良いと考える。
- ・ 方針を出せていない大学の助けになれば良いことから、ガイドラインに賛成する。学生については大学で考えるべきで、妥当と考える。
- ・ 私情協から発信することには賛成する。関連する授業はしていないが、オンデマンドの評価で課題を持っている。
- ・ これまでの AI との違いで、対話型でデータクレンジングされておらず、嘘を言う危険性があり、学習によりリスク課題の軽減を期待する。
- ・ 大学での発信を考えており、授業で調査した。知らない学生が1割、使った学生が半数、会話・検索・プログラミングで使用した。使いたいのが8割で、プログラミングに活用したい希望が多かった。他大学の見解については、積極的な姿勢に賛成、相談システムの表現が良かった、学生時代に経験を積みたい、未来に向けた積極的な活用に希望があったなどの感想から、大学の発信については、学びを深める点を重要視してほしい、AI 活用を推奨してほしい、AI を活用して新たな考えを創造したいなどの希望があった。
- ・ 学生が使うときは、判断して使わせているが、あまり使っている様子はない。
- ・ 授業の雑談で話題に出したが、信憑性を調べられるように勉強する必要があると説明している。
- ・ どれくらいでどうなっていくかが分からない状況で、使い方含め限界・展開など見越せるかのヒントを期待している。
- ・ 大学では何も対応はなく、問題点・注意点を出示してもらえれば検討材料になると思う。
- ・ 大学でも議論しており注意して使うようにとの方向、ご存じない教員も多い。大学教育の在り方が問われる問題とも考えられる。どう使うかの興味が学内でもあり、積極的に使うことは大事だが、経済格差と知的格差で教育機会の平等、教育プログラムについても考えたい。
- ・ 格差はイメージを持っていなかった。学年による利用の違いも興味がある。
- ・ 学生に如何に使わせるか、調べた結果を鵜呑みにする危険、如何に気付けるかを教育したい。
- ・ 以外に学生が使っていないことから高校までの情報の学びの使う・使いこなす格差を感じた。
- ・ 注意喚起はしているが、使うことの否定はしておらず、学内でコンセンサスしている状況。使いながら AI に対する質問力のトレーニングも考えている。
- ・ ゼミで聞くと利用が多かった。まず自分で書いて、ChatGPT で作成させたものと全員で比較する取組みを考えている。
- ・ 著作権、個人情報問題を注意して使うことにしており、使ったところに下線を引かせている。
- ・ 法令違反はNGとして、AI に著作権は発生しないが、オリジナルはないことから、引用がなく、現著作物の侵害の範囲を考える必要がある。ネットに情報が少ないものはオリジナルに近いが侵害の危険性があり、可能性のある行為には継承を鳴らす必要がある。著作者人格権の同一性保持権侵害を理解して注意喚起の方向性を示す必要がある。
- ・ 著作権の問題は、オリジナルが融合して回答されることになり、画像系では敏感になっている。使った

ことのない教員もあるが、自分で出した課題を AI に答えさせておくぐらいの準備は必要ではないか。バージョンアップから、社会でのアイテムになり、指示の仕方が大事で使い方の教育が必要ではないか。

- 使いこなすことが経験優位で、質問の仕方で主計表ができ、使いこなす AI リテラシーを強調しており、自分の意見をどう絡ませたかを書かせる試験などもある。
- 効率化だったが、質の変化となり、学生の学びを高めるために、どう示すかが大切ではないか。
- 原理原則から大学で考えてもらう方向が良いのはないか。使う方向で考えており、不正確で無意味な回答もありことを確認させ、回答を受けて、指摘をして再質問し、修正回答を出させ、その繰り返しで、学生は答えが不安定なこと意識させ、自分が理解している部分から利用し、鵜呑みにせずテンプレート的に使うことが考えられ、授業で体験させている。
- 先生方が意見を出し合う場が良いと考える。学生が自己責任で使うことを徹底させたい。アルゴリズムの理解は役に立つと考える。試験問題の正答率から、学生育成には想定外への対応力が求められ対面・面接も大切になるのではないか。学生が社会で輝けるよう送り出してほしい。

6. 配慮すべき主な観点について参考メモと意見

- デジタル革命の中で、生成系 AI の可能性と限界を理解し、対応できるよう学生・教員に生成系 AI を体験する機会を授業、FD で設ける必要がある。使用禁止ではなく、実践を通じて「何ができて」、「何ができないか」、「どのような潜在力や課題があるか」を、確認し合える機会が望まれるのではないか。
- 社会変化として捉え、思考を深める学びを支援するツールとして、使いこなす訓練が不可欠になり、社会で効果的に活用することが求められ、卒業までに情報活用能力の一環として、期待される答えが生成系 AI で得られるよう、適切な質問や指示が出せるスキルを身に付ける学びが不可欠ではないか。
- 生成系 AI の大学教育での使用は、使用方法、学びの成果、学修評価など用途に応じて多様な影響が想定され、一律に禁止できないと考え、条件により利用を奨励できるのではないか。
- メモの内容では、こうやるという方向が書かれており、禁止する方向にもとれるのではないか。
- 何ができて何ができないのかは、発展途上のため、ここまで言う必要はないのではないか。
- データサイエンスの中で、AI の理解は行っているので、ここで書く必要はないのではないか。データサイエンスとの関連での書き方で、例えば、可能性と特長のような表現で修正してはどうか。
- 大学では失敗するフィールドとして、失敗を恐れずに使ってみることを推奨している。
- 禁止は、理解して使いましょう程度の表現にすべきではないか。また、丸写しで提出する学生はならず、大学の質が問われる表現にもとられる可能性がある。
- 相談相手は、思考・認知などを向上させる記述を使った方が良いのではないか。
- 例えばとして、観点などで検討の例を紹介してはどうか。踏み込んでいる表現は、教員が求められているとの指摘にとられる可能性があり、AI 等の対応が進まない大学向けには表現を優しく検討してはどうか。
- 教育で仕様する上で配慮する点などの意見交換や、それをまとめたものを共有する場の表明程度に抑えてはどうか。
- ガイドラインを大学への発信として完結させる。その上で、学生の視点での向き合い方でソフトな感じの参考資料として、数名の委員と整理することにした。

VI. 今後のスケジュール

生成系 AI 使用ガイドラインと学生視点の参考資料を整理の上、3 月末の総会に提示することにした。